特集　奈良ですけど。

PART.Ⅳ

多様な奈良に向かう。

―NARAS―

27

中川夢生（4年生）は、「近頃、女性を中心として写真を撮る際にお気に入りのぬいぐるみも添えてまるでぬいぐるみが生きているかのような写真を撮る」ことが流行っていると書き出して、これを「癒やし」と結びつけた。奈良町の「赤いぬいぐるみのようなもの」を「何とも可愛い」と言い、「明日香村」なら「自転車」に乗りながら「ぬいぐるみ」とともに観光地を撮れるかもと胸を躍らせる。そして、古い「水面から感じ取れる癒し」の場である猿沢池は、「のぞき込んでいる姿をぬいぐるみと共に撮影」でき、また興福寺南円堂では「ぬいぐるみが自分自身で鈴緒（すずのお）を鳴らしてお参りしているかのような撮影」ができるところと観て取った。

28

「若者」は奈良をどうみているのか。奈良の観光における最重要テーマの1つに取り組んだのが、喜多村凛花（1年生）である。「大半の友人たち」が「奈良には何もない」と言うが、本当にそうか。「食文化」はどうか。奈良の「名産品やお土産」のほとんどは、「若者にとって渋いものであり、あまり好まれない。」では、「ショッピング施設、レジャー施設」はどうか。いずれも「規模はなく、「若者は大阪や京都に分散してしまう。」「せんとくん」も「一般的にかわいいとは言い切れない」し、「土産物」は、なにより「まず人に知ってもらうことの方を優先すべき」だ。「歴史」の説明も「ストーリー性」が欠けている。「"インスタ映え"スポット」も少ない。これらが指し示すところ、結局「"奈良は若者志向になる必要はない"」のではないか。

奈良本来の良さは「リラックスできる場所」だ。これは「そもそもの若者の需要と合っていない」のである。コアコンピタンスを犠牲にしてまで若者を取り込む必要はなく、「自然に奈良に行きたいと思ってもらえるような」自然体の誘客が奈良には相応しいのだろう。

29

奈良の魅力は「人智を超え」ていると溜息をついたのは、鈴木沙和（2年生）である。「人々は一体何に惹かれ、数ある日本の観光地から奈良を旅先へと選ぶ」のか。各所を巡っても、たくさんの本を読んでも、答えは見つからなかった。明治期の「エルウィン・ベルツ」も昭和期の「バーナード・ショー」も、「志賀直哉」も「森鴎外」でさえも、ただ奈良を賞賛するばかりで、理由を言わない。いや言わないのでなく言えないのだ。「人智を超えたものがあると思う」ほかないと、ウィトゲンシュタイン的諦念に引き込まれながら、それでも「その計り知れないところをも奈良が褪せることのない」魅力の一つと、最後のところで踏みとどまって、あるいは「全てを包み込むような不思議な空気」かもしれないと、気丈にもさらなる追究の姿勢を示すのであった。

30

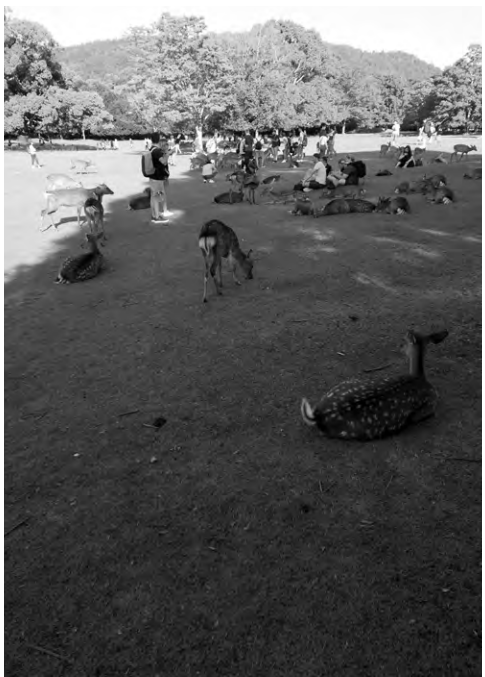
廣瀬達也（1年生）は、「自炊」で「食」の重要性を実感した。食事は「ただの生き延びるための行為」ではない。「心を豊かにする儀式」なのではないか。そこで「奈良に質の高い食事を求めることはできるのか」を考えてみることにした。食事の「質」に標準や基準はないから、自分で体験するしかない。

「元興寺」をはじめ奈良市内の観光地を散策しながら、「江戸川ならまち店」・「松屋奈良駅前店」・「サイゼリア三条通り店」で食事をとった。驚いたことに、どの店の食事も「質」が高かった。「江戸川」は観光地内にあり、比較的高価だが味の素晴らしい「しっかりとした和食」で、「海外からの来訪客」も満足そうだった。「松屋」と「サイゼリア」は「手軽さ、立地の良さ」そして「提供されるスピード」に優れていた。安価でしかも美味である。

三店に共通していたのは「接客」の素晴らしさだった。さて「奈良に質の高い食事を求めることができるのか」。答えは明らかだ。観光地で奈良の歴史文化を堪能し、歩き回って「空腹状態」の中、しかもお店の「接客は丁寧」である。観光地・奈良の食事は『いただきます』と言う前から始まっている」のだ。

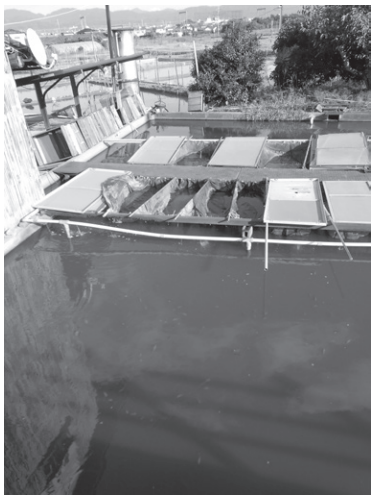
31

浅野なつ葵（1年生）は、「奈良への外国人観光客は西洋人が多い」と気付いた。隣接する大阪では「アジア系の人」が目立つのになぜだろう、と。そこでまず「インバウンド観光地ランキングの5位」の「東大寺」に行ってみた。ここでは「公式のホームページを日本語以外に英語でも読めるようになっている」るほか、「観光ガイドアプリの導入の実証実験」も行われ、多言語で「東大寺の概要や歴史の説明や、参拝マナーを説明」してくれる。また観光地ランキング「11位」の奈良公園では、『『観光客とシカのトラブル』に対応するために英語で『The deer in Nara』という解説動画」が作られている。これは「多くのメディアに取り上げられたほか、NYの『Communicator Awards 2016』においてオンライン動画3部門で銀賞を受賞」した。奈良の観光地は西洋人には目新しい魅力に満ちているが、それ以上に、すでに「観光名所として人気がある上に外国人観光客のための対策が行われて」いたのである。



32

上島小和（1年生）は、「地元」の「語り部」にならんと心に決めた。教科書の知識だけでは飽き足らず、多くの文献を渉猟して「大和郡山」の歴史を探った。西暦「1300年、薬園庄より独立し郡山庄が生まれ」たことや、「1585年、〔織田〕秀長、郡山城に入る」と「奈良の商売を禁じ、郡山の城下繁栄を図」ったこと、明治に入ると「郡山城売却処分入札」されたことは知っていたが、全国的に有名な「金魚」は、「1724年、柳澤吉里」が「甲斐の国から郡山藩主として国替りした時に持ってきた」ことに始まり、「家臣横田又兵衛、玩弄物として飼育」して普及したとは知らなかったし、「紺屋町、塩町、北大工町、鍛冶町、雑穀町、豆腐町、藺町などの地名」が城下町の所以とも思わなかった。さまざまな新知識は得たが、これだけでは語り部にはなれない。事実とされてきたことが「本当かどうか、そのソースを掘り起こす」ことも、また「自分独自の考察も交える必要」もあるが、事実の考察の弁別はいかにすべきか、「語り部」見習い・上島の学びは続く。



33

宇田奈那子（1年生）が注目したのは「金魚」である。今では縁日の「金魚すくい」で、子どもにも身近な存在だが、16世紀初頭に中国から渡来した当初は、「貴族、富豪の甚だ珍奇な愛玩物」だった。「江戸時代後期には、金魚すくいが始まっ」たが、「楽しめる場所は限定的で、大阪、京都、江戸」だけだった。今や金魚すくいのメッカともいえる大和郡山では行われていなかったのだ。

「庶民の間で流行したのは明治」に入ってからである。大和郡山では「幕末のころになると、藩士の副業として、明治維新後は、職禄を失った藩士や農家の副業」となった。「維新の騒ぎの時にも全員そろって金魚屋に転職した」というエピソードも残されているほど、金魚養殖は盛んに行われた。もちろん、それには「農耕用溜池」等の「養殖に適した自然環境があった」からだ。さて、和歌山県には、近世に「金魚茶屋」があったというが、大和郡山にもあったのだろうか。金魚の謎は奥深い。

34

これからの「今井町」はどうあるべきか。道方咲帆（1年生）が自らに課した課題がこれだった。そのために、まず「今井町の成り立ち」を調べ、「過去行ってきた取り組み」をトレースしようと考えた。今井町は「大和随一の自治経済の町」と称されるが、もともとは「四方に壕をめぐらして防備を固めた寺内町」だった。十六世紀末に「商業都市」となって以降今日まで、「防備上見通しのきかぬ構えで」つくられた道路や「伝統的な様式」の家屋の残る「環濠集落」として維持されている。「生活の快適さ」を求める「住民意識」を乗り越え、「住民一体となり、町並み保存へと動き始めた」のは、「一九七五年」の「親和会」の結成が契機となった。「一九九三年に重要伝統的建造物保存地区に選定された」が、これは「ゴール地点」ではないだろう。今後も「現状の町並みを維持していく」には、「町の人たちが協力的でないといけないことは自明」だが、さらに『よそ者』が寄せる関心が必要不可欠ではないか。自ら「よそ者としてできること」を道方は「模索」していく。

35

湯浅亜美（1年生）の興味は「天理教」に向かった。奈良県の「天理市には天理教という宗教があ」り、「通学路」にも「黒いはっぴを着た人が歩いて」おり、「商店街には天理教の人のためのものを売る店」もある。市や地元への「経済効果」も少なくはないだろう。湯浅は、そのような宗教の日常性に関心をもったのだ。そこで「天理教の規模」・「歴史」・「教え」をざっと見て、「おつとめ」・「ひのきしん」・「おぢばがえり」のあらましにもあたった。「教祖・中山みき」の安産祈願の「をびや許し」は、当時の人々の心に響き、「陽気ぐらし」の考え方は人を惹きつける。そのような教義を学べる場や機会は開かれているが、「天理教への具体的な入り方は天理教HPには載せられていな」い。その振る舞いに、節度や慎みを感じる。天理教の日常性の本領は、「天理教本部教会は24時間開いている」といったところに、発揮されているようだ。

36

高橋紀花（1年生）は、諸資料・文献を丹念に読み解き、「武者小路にとって奈良は何か」を考えた。大正14年末、武者小路実篤は、開村以来7年間住み慣れた宮崎の「新しき村」から、「奈良市水門町五二」に居を移した。転居理由の1つは、自ら提唱した「新しき村」の理想―平等なる自由と同一なる生活―と、自分自身の置かれた境遇とのギャップであった。「村には住めない」武者小路は、『村外会員』として「取り組みを支持する」立場を選んだ。転居の翌年、『新しき村』の奈良県支部」が設立された。これは武者小路の発意によるのだろうか。高橋は、当時の新聞記事から『新しき村』の村民」であった「渡邊三郎」という人物が「武者小路よりも先に奈良に移っ」ており、その渡邊が「新しき村奈良支部の事務局を受け持っていたことを知る。奈良支部は武者小路の奈良転居を契機に結成され、その活動には「トルストイとゲーテの誕生」祭・講演会・朗読会などが含まれていた。武者小路が「和歌山に移り去」った後も「渡邊三郎を中心として、演説会や演劇など『新しき村』奈良支部としての活動が存続し」た。武者小路の奈良在住は1年に満たず、奈良関連の著作は多くないが、新しい思想や実践はその後の奈良の文化にも少なからず影響を与えたといえるだろう。

37

若杉悠里（1年生）は、「山の辺の道」を歩いた。なぜ古代の道が「今なお残っているのか」を不思議に思った。「山の辺の道」は、日本史上最古―現存する最古―の道とも言われ、もともとは大和青垣の裾を、三輪山の麓と春日山の麓を結ぶ南北往来の要路だった。「現代」では主に「桜井駅から天理駅をつなぐ、約16キロメートル」のルートを指すが、周辺には―あるいはこの道に含まれるかたちで―「大神神社」・「相撲神社」・「永久寺跡」等の由緒ある古社寺や、「纒向遺跡」・「櫛山古墳」・「崇神天皇陵」等の古墳が集積している。その「景観が、古都保存法により文化財として位置づけ」られているが、実のところ、中世から近世の地誌にはほとんど現れない。「山の辺の道」は「1930年代以降のハイキングブーム」と40年代を中心とした観光政策を契機に再発見され、観光名所をつなぐ「ハイキングコース」と全国的に紹介されていった。今日では「地域住民と協働し」た取り組みとも相俟って、記紀・万葉に代表される古代ロマンを感じさせる道として定着している。「山の辺の道」が、三輪・石上を含む周辺地域の「歴史的なもの」の中核に位置する限り、将来にも継承される歴史の道であり続けるだろう。

38

西林真理（1年生）は、「奈良の観光と交通」に真正面から向き合った。検証の方法も正攻法の「フィールドワーク」だ。やってみて驚いた。調査に行けたのはわずか「5か所」、しかも奈良市の観光地ばかり。奈良市外は「行きづらい」のだ。「法隆寺などはまだ大阪の近くにあ」って「行きやすい」方だが、それでも「駅から少し離れている」ので時間がかかる。まして「奈良県南部はより交通が発達しておらず、観光客が訪れにく」い。一方、奈良市等の「奈良県北部は交通網も発達」しており「大阪・京都に行きやすい」ので、「観光客は多いのに、宿泊客は少なく、観光客が落とすお金は「全国最下位」である。しかし見方を変えれば「大阪・京都から奈良県北部へも行きやすい」のだ。「北部から南部への交通を便利にす」れば、「南部」は「宿泊向けの観光資源が多い」から、県全体での「宿泊観光客が」増えるのは明らかではないか。そこで西林は言う。奈良市等の著名観光地を通過地点にして、南部にデスティネーションをシフトさせてはどうか、と。確かに、明治期のイザベラ・バードも奈良公園周辺はほぼ素通りして、長谷寺の絶景に驚嘆していた。観光面での「交通」とは、アクセスの容易性だけではないのかもしれない。

39

編集者は奈良県立大学の２０１９年前学期で「奈良文化コンテンツ論」を担当した。本論著者39名の学生は、講義受講者―の一部―でもある。向井優大（1年生）は、メタレベルでその講義内容を編集し、鋭く洞察してくれた。逐一採り上げることはできないが、例えば『奈良漆器』では「全国の漆産業」との比較検証が不足し、他の産地に学ぶ余地に言及できていなかった。『赤膚焼』で奈良絵が隆盛を極めているのは、あるいは「赤膚山の土」が使えなくなったことと関わりあるのではないか。「祈り」で神社が多く扱われたが、シンボルとも言える「鳥居」、とりわけ「木々の緑」の中で「赤い鳥居が連続しているところ」に意味はないのか……。

ご指摘、痛み入ります。勉強し直して参ります。懲りずに、後学期の「奈良イメージ論」も受講してくださいね。そちらもやはり、

「奈良ですから。」

【註記】

本論の内容には、事実誤認や思い違いも含まれているかもしれません。お気づきの点は、本センターの事務局にご指摘ください。

また、レポートの趣旨と異なる編集が混じっているかもしれない。学生の皆さんごめんなさい。

そして、ありがとう。